

# 日本英文学会関西支部 第18回大会資料

プログラム

研究発表・シンポジウム要旨

日時：2023年12月17日（日）11：00より

会場：神戸大学鶴甲第1キャンパス（〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1）

日本英文学会関西支部事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

立命館大学 文学部 英米文学専攻内

E-mail: [kansai@elsj.org](mailto:kansai@elsj.org)

## 会場（神戸大学鶴甲第1キャンパス）までのアクセス



徒歩：阪急「六甲」駅から徒歩 25 分程度です。

神戸市バス：阪神「御影」駅、JR「六甲道」駅、阪急「六甲」駅から

16 系統、106 系統「六甲ケーブル下行き」に乗車し、  
「神大国際文化研究科前」下車です。

※ 駐車場はありませんので自家用車でのご来場はご遠慮ください。

## 会場構内案内図



⑮ 大会会場 K棟

⑳ 懇親会会場 A棟地階生協食堂多目的ホール

\*発表会場のK棟は、キャンパス奥にあります。大会受付（K棟入口）にて、参加者名簿にご記入をお願いします。受付は10時30分より開始します。なお、当日の年会費の受付はいたしません。事前のお振込みをお願い申し上げます。

\*学内のコープや売店は閉店しております。大学近辺には食事をするところがほとんどないため、各自、昼食をご持参ください。またゴミは必ずお持ち帰りください。

\*急な変更が生じた場合は関西支部HPで案内いたします。支部サイトの学会情報も随時ご確認ください。  
(<https://www.elsj.org/kansai/>)

### 懇親会と託児サービス：

本大会より懇親会と託児サービスを再開します。詳細は9月末ごろに関西支部HPにてお知らせいたします。懇親会参加希望の方、託児サービス利用希望の方は関西支部HPをご確認の上、10月末までに手続きしてください。

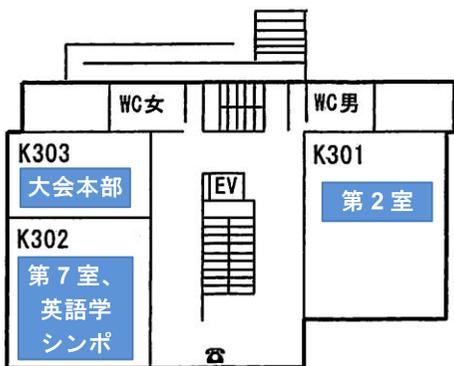
## 教室案内図

(※ 発表会場の K 棟に 1 階はありませんのでご注意ください。)

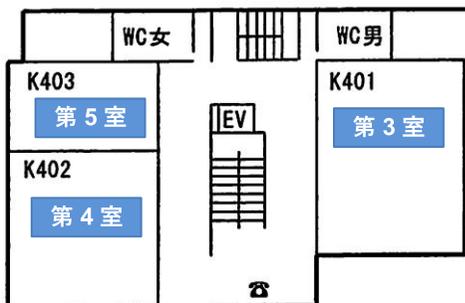
### K 棟 2 階



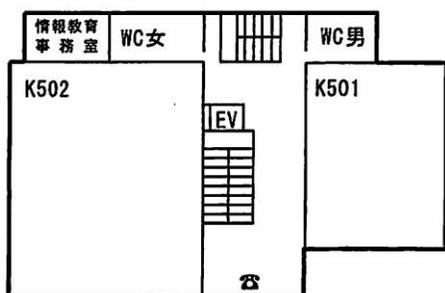
### K 棟 3 階



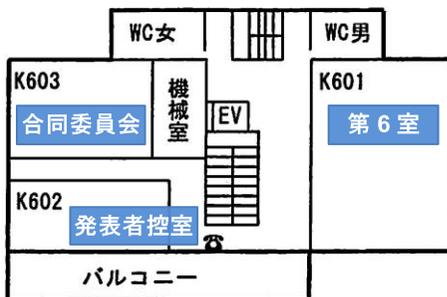
### K 棟 4 階



### K 棟 5 階



### K 棟 6 階



## 懇親会会場

懇親会は A 棟地階生協食堂多目的ホールにて開催します。事前登録制です。詳細と場所については前頁の会場構内案内図をご参照ください。

# 日本英文学会関西支部第18回大会プログラム

日時：2023年12月17日（日）11：00より

会場：神戸大学鶴甲第1キャンパス（〒657-8501 神戸市灘区鶴甲1丁目2-1）

**大会受付** 10：30より（K棟入口） 受付、懇親会費納入

**開会式** 11：00より（K棟2階K202講義室）

挨拶 日本英文学会関西支部支部長 竹村 はるみ

**研究発表** 第1発表 11：10～11：50 第2発表 11：55～12：35  
第3発表 13：30～14：10 第4発表 14：15～14：55

## 第1室（K棟2階K202講義室）

---

司会 神戸大学講師 中村 麻美

### 1. どこにもない南海「理想郷」

——W. S. Maughamの南海作品における「逆行するユートピア」表象

立命館大学大学院生 幸 寧

司会 関西大学教授 高橋 美帆

### 2. イギリス詩人 W. H. オーデンの到達点としての中国

——1930年代世界文学としての *Journey to a War*

同志社大学大学院生 藤田 萌々子

司会 神戸市外国語大学教授 西川 健誠

### 3. 【招待発表】海賊と錬金術師と航海者

——アーモストの詩人エミリ・ディキンソンの始め方

同志社大学教授 圓 月 勝 博

## 第2室（K棟3階K301講義室）

---

司会 関西外国語大学准教授 馬 淵 恵 里

### 1. *Sense and Sensibility* における“propriety”の深化

京都大学大学院生 熊木 理 恵

### 2. *Old Mortality* における言葉と権力

大阪教育大学特任講師 筒井 瑞 貴

司会 京都大学教授 栗山 智成

3. 『ロミオとジュリエット』の映画作品における「手」のジェスチャー

龍谷大学准教授 吉村 征洋

4. 【招待発表】地震と書簡

京都大学名誉教授 水野 眞理

第3室 (K棟4階K401講義室)

---

1. (発表なし)

司会 関西学院大学教授 高村 峰生

2. 【招待発表】ドメスティシティと個の空間——Edith Wharton の *The House of Mirth* の場合

同志社大学教授 石塚 則子

司会 甲南大学教授 秋元 孝文

3. デジタル・テクノロジーの死——Don DeLillo, *The Silence* が描くバベルの塔の崩壊

神戸大学助教 平川 和

4. どこでもない部屋——Paul Auster 作品における「ホテル」表象

追手門学院大学講師 植村 真未

第4室 (K棟4階K402講義室)

---

司会 関西大学教授 板倉 巖一郎

1. オーストラリア日系強制収容文学の考察

——Cory Taylor の *My Beautiful Enemy* における人種・セクシュアリティ表象を手がかりに

大谷大学助教 古川 拓磨

2. アリ・スミス四季四部作における〈共<sup>コモン</sup>〉の可能性

大阪大学准教授 霜鳥 慶邦

司会 関西外国語大学教授 服部 典之

3. *Never Let Me Go* における恋のさや当て—先導(者)、人称代名詞、笑い

京都大学大学院生 杉野 久和

4. *The Remains of the Day* における疑似家族への思慕

関西学院大学大学院生 平野 牧子

第5室 (K棟4階 K403 講義室)

---

司会 関西学院大学教授 松宮 園子

1. ポストヒューマン文学における「尊厳」——*Never Let Me Go* と *Machines Like Me* との比較を通して  
京都大学大学院生 肖 軼 群
2. 人工知能は人間の「継続」になれるか——*Klara and the Sun* に見る AI 像と人間像——  
近畿大学非常勤講師 陳 懌 懿

司会 ノートルダム清心女子大学教授 新野 緑

3. ジョージ・エリオットのリアリズムの進展における『急進主義者フィークス・ホルト』の位置づけ  
同志社大学嘱託講師 石井 昌子

第6室 (K棟6階 K601 講義室)

---

司会 神戸常盤大学教授 山崎 麻由美

1. フロレンス・ナイチンゲールの著述をマーガレット・フラーとの比較から読み解く  
岐阜県立看護大学准教授 木村 正子
- 司会 阪南大学教授 杉村 醇子
2. 『キャスタブリッジの町長』と冗談の倫理  
広島市立大学講師 原 雅樹

司会 同志社大学教授 桐山 恵子

3. ウォルター・ペイターと透明な自己——〈想像の肖像〉における理想的人格——  
京都大学大学院生 虹 林 桜
4. 「王女の誕生日」における外面と内面の美醜の相克とそのアイロニー  
武庫川女子大学大学院生 森 元 奈 菜

第7室 (K棟3階 K302 講義室)

---

司会 神戸大学准教授 南 佑 亮

1. 「Vi up to 人」構文と社会的接触

立命館大学嘱託講師 濱 上 桂 菜

司会 関西外国語大学准教授 大 宗 純

2. Dialectal variations and agent phrase in *get*-passive: a case of New Zealand English

大阪公立大学教授 豊 田 純 一

司会 神戸大学准教授 南 佑 亮

3. 【招待発表】形容詞的受身と状態性

龍谷大学教授 前 川 貴 史

シンポジウム 15:10~17:30

英米文学部門 (K棟2階 K202 講義室)

---

幽霊を見る、死者の声を聞く——英米文学における生と死のあわい

司会・講師	同志社大学教授	下 楠 昌 哉
講師	龍谷大学准教授	池 末 陽 子
講師	関西外国語大学講師	友 田 奈 津 子
コメンテーター	アンソロジスト・文芸評論家	東 雅 夫

英語学部門 (K棟3階 K302 講義室)

---

焦点化・主述関係の諸構文をめぐる統語と意味

司会・講師	関西外国語大学准教授	山 口 真 史
講師	大阪大学大学院生	中 野 晃 希
講師	関西学院大学助教	小 林 亮 哉

総 会 17:30 より (K棟2階 K202 講義室)

閉会式 17:50 より (K棟2階 K202 講義室)

挨拶 日本英文学会関西支部大会準備委員長 荘 中 孝 之

懇親会 18:10 より (A棟地階生協食堂多目的ホール) 会費 5,000 円

# 研究発表要旨

## 第1室 (K棟2階 K202 講義室)

---

第1発表 (11:10 より)

司会 神戸大学講師 中村麻美

### どこにもない南海「理想郷」 ——W. S. Maugham の南海作品における「逆行するユートピア」表象

立命館大学大学院生 幸 寧

1920年代前後、W. S. Maugham の南海への旅体験に基く作品群は、白人移住者が植民地に託したユートピア的想像世界を描き出した。その中では、未来ではなく「過去」に向かったの「ノスタルジック」な情緒あふれるユートピア的想像が頻繁に表象されている。作中の登場人物が本土での喪失感を埋めるために、戦間期の平穏な南洋植民地において、良き「過去」——例えば聖書が語る楽園、前近代の封建的な共同体、牧歌的な田舎生活——の「逆行するユートピア」を再生産しようとする。また多くの夢が、植民者内部の摩擦や植民者と原住民との間の衝突によって攪乱され、破綻したという負の描写は、当時の南海植民地の暗い影を垣間見せる。本発表では、Maugham の南海作品群における「逆行するユートピア」の表象を考察していきたい。さらに‘Outstation’ (1924)、‘Red’ (1921)と ‘Mackintosh’ (1920)を具体的に分析することで、Maugham の南海作品は第一次大戦後の西洋の海外統治の衰退をいかに反映しているのかを検討する。かつての「理想郷」であった南海植民地が、植民者にとってはやユートピアではなくなった、とモームが考えたのではないだろうか。

第2発表 (11:55 より)

司会 関西大学教授 高橋美帆

### イギリス詩人 W. H. オーデンの到達点としての中国 ——1930年代世界文学としての *Journey to a War*

同志社大学大学院生 藤田萌々子

本発表の目的は、W. H. Auden と Christopher Isherwood の共作 *Journey to a War* (1939) の文学的価値を再評価することである。日中戦争の取材記録である *Journey to a War* には、散文で書かれた旅行日誌と、ソネット連作および韻文注釈が写真と地図を付して収録されている。従来は主にソネット連作が個別で研究されてきたが、*Journey to a War* という作品全体を歴史的文脈の中で考察した研究は少ない。1930年代の英語文学市場では中国関連出版物が広く読まれ、英語圏外で書かれた著作も次々に英訳されるなど、世界文学の様相を呈していた。旅行日誌はそれらの著作と対話しながら中国を描いており、一見すると日中戦争とは無縁の人類史を語るソネット連作も、当時の出版状況を踏まえて精読すれば、同時代の中国関連出版物に言及していることが明らかになる。本発表では、*Journey to a War* が国籍や言語を越えた文学的結集点として日中戦争下の中国を描いたことを示す。

第3発表 (13:30 より)

司会 神戸市外国語大学教授 西川健誠

## 【招待発表】海賊と錬金術師と航海者

——アーモストの詩人エミリ・ディキンソンの始め方

同志社大学教授 圓 月 勝 博

エミリ・ディキンソン (Emily Dickinson) の最良の詩は、いつも意表を突いた 1 行目で始まり、異次元の世界に読者を誘う。たとえば、「予期せぬものを信頼せよ」(“Trust in the unexpectedness”) という 1 行目で始まる作品は (フランクリン版 561 番)、「予期せぬもの」を信頼することができた人物として、海賊、錬金術師、そして、航海者コロンブスを次々に列挙する。そう言えば、アーモスト館と命名された建造物を誇る同志社の建学の祖である新島襄も、幕末に国禁を犯してアメリカへ航海することを決意したとき、アーモストというニューイングランドの辺鄙な大学町に辿り着き、ディキンソンという女性が近所でひそかに言葉の錬金術に没頭していることなど予期していなかった。鮮烈な 1 行目を連発しながら、ディキンソンが語り続ける「予期せぬもの」を探し出すことが本発表の目的である。

### 第 2 室 (K 棟 3 階 K301 講義室)

---

第 1 発表 (11:10 より)

司会 関西外国語大学准教授 馬 淵 恵 里

#### *Sense and Sensibility* における“propriety”の深化

京都大学大学院生 熊 木 理 恵

「人としての振る舞いの適切さ」即ち“propriety”という問題は、Jane Austen の全作品に共通して見られる重要なテーマの一つである。それは、Austen が生きていた 19 世紀初頭前後のイギリス社会、特にジェントルマン階級において、人々がそこで生き抜くために順守せざるを得ない「指針」であり、また、各々の「品位」や属する「家」を社会的に示す「マーカー」でもある。同時に、Austen が描出する“propriety”は、単なる「人としての振る舞いの適切さ」にとどまらない。女主人公たちが人として適切に振る舞おうと尽力する時、そこには同時に、彼女たちの強さ、人間的な成長、そして好きになった相手への深い愛情が現れるからである。作家としての出発点とも言える *Sense and Sensibility* (1811)を通して Austen が考究する“propriety”は、*Pride and Prejudice* (1813)以下、後続する彼女の小説において繰り返し表象される“propriety”の礎となっている。本発表では、Elinor Dashwood が追究する“propriety”に着目し、この概念が物語の展開と共に解かれ、新たな意味合いを帯びながら深化する様について考察する。

第 2 発表 (11:55 より)

#### *Old Mortality* における言葉と権力

大阪教育大学特任講師 筒 井 端 貴

17 世紀後半のスコットランドの動乱期を描いた Walter Scott の歴史小説 *Old Mortality* (1816)は、王政復古後の Charles II の治世下で王党派から苛烈な迫害を受けていた盟約派による反乱を描いているが、作品の構造はきわめて複雑なものとなっている。敬虔な盟約派信者である老人 Old Mortality から聞き取った物語を、田舎教師の Peter Pattieson が党派的な偏見に歪められている箇所に修正を施して記録し、その原稿を編者である Jedediah Cleishbotham が批判を交えつつ紹介するという多層的な語り の 枠組みが採用され、Scott による不偏不党の歴史叙述の試みと認識されている。本発表では、まず作品内部における「叙述」行為に注目し、メッセージの解釈および伝達、テキストの改竄や上書きといった企てに内在する権力への欲望を明らかにし、

同様の主権を巡る相克が、複数の編者・語り手が他者のテキストに介入する作品の枠組みそのものにおいても反復されていることを明らかにしたい。このことは、Scottの志向した「公平性」の限界と綻びを改めて検討する必要性を浮き彫りにすると考えられる。

第3発表 (13:30 より)

司会 京都大学教授 栗山智成

### 『ロミオとジュリエット』の映画作品における「手」のジェスチャー

龍谷大学准教授 吉村征洋

本発表では、フランコ・ゼッフィレリ監督の『ロミオとジュリエット』とバズ・ラーマン監督の『ロミオ+ジュリエット』における登場人物の手のジェスチャーを分析し、シェイクスピア作『ロミオとジュリエット』との差異について考察する。原作では登場人物の手を通じて、登場人物の感情や状態が表現されている。例えば、ロミオとジュリエットが初めて出会うシーンでは、“hand”を複数回用いながら、二人の手を通じて恋人たちの愛の萌芽が表現されている。ロミオはティボルトを殺害後、自分の手を“cursed hand” (3.3.104)と言い、この場面で彼の手は罪と罰の象徴となっている。

登場人物のこうした手の役割に関して、舞台演出における手のジェスチャーや役割については数多く検証されてきたが、映画作品に関してはほとんど検証されていない。そこで本発表では、2つの映画作品における手のジェスチャーについて検証し、両監督が登場人物の手のジェスチャーに込めた意図を考察したい。

第4発表 (14:15 より)

### 【招待発表】地震と書簡

京都大学名誉教授 水野眞理

Edmund Spenser (1552?-99)と Gabriel Harvey (1552/3-1631)の間で交わされたとする書簡集(1580)には、1579年4月の地震への言及がある。この地震に関しては Thomas Churchyard、Arthur Golding もパンフレットを残しており、英国では珍しいこの現象が人々に大きな衝撃を与えたと推測される。本発表ではそれらの記述を比較し、当時の地震に関する科学的、政治的理解について考える。往復書簡集とは、表向きは私的な行為である書簡執筆を、時事をちりばめつつ公にするという極めて演技的な出版形態であり、その中で言及される地震にいかなる意味が認められるのかを考えたい。

## 第3室 (K棟4階 K401 講義室)

---

第1発表 (発表なし)

第2発表 (11:55 より)

司会 関西学院大学教授 高村峰生

### 【招待発表】ドメスティシティと個の空間——Edith Wharton の *The House of Mirth* の場合

同志社大学教授 石塚則子

Elaine Showalter は、主人公 Lily Bart の死で閉じられる *The House of Mirth* (1905)には、「女性の団結の新し

い世界」と「新しい女性」の登場の可能性が示唆され、Lily の悲劇的な死には新しい women's fiction への展望が窺えると論じている。確かに、本作品は著者 Edith Wharton (1862-1937)にとって「気ままな素人からプロの作家」へと変貌を遂げる転換点となる作品であるものの、Showalter が主張する「愛のある連帯と共同体意識」に Lily が目覚めたかどうかについては疑問が残る。本発表では、women's fiction の系譜に本作品を再定置しつつ、実人生においてもまた創作のなかでも、Wharton が 19 世紀半ばの家庭小説で称揚されたドメスティシティ言説から脱却し、ジェンダー化された空間やジェンダー規範を脱構築していく軌跡を、Lily の転落の軌跡と重ね合わせながら読み解いていく。

第 3 発表 (13:30 より)

司会 甲南大学教授 秋 元 孝 文

### デジタル・テクノロジーの死——Don DeLillo, *The Silence* が描くバベルの塔の崩壊

神戸大学助教 平 川 和

Don DeLillo が 2020 年に上梓した *The Silence* は、2022 年 2 月のスーパーボウルサンデーに、突如として原因不明の大停電に見舞われ、一切の通信機器が使用できなくなり、コミュニケーション不全となった世界を描いている。ここで興味深いのは、あらゆるメディアへの接続を断ち切られてもなお、登場人物たちの発話がメディア的言説に支配されていることである。停電後も、彼らの（無）意識はデジタル・テクノロジーの亡霊に取り憑かれたままであり、もはや彼ら自身がオフラインでも自動的にメディア的言説を再生産しつづけるメディアそのものと化したと言っても過言ではない。このことは現代人のコミュニケーションがいかにかデジタル・テクノロジーに依存しているかを逆説的に物語っている。本発表では、大停電による「デジタル・テクノロジーの死」がもたらすコミュニケーションの断絶に焦点を置くことで、*The Silence* を現代版「バベルの塔の崩壊」として読み解いていきたい。

第 4 発表 (14:15 より)

### どこでもない部屋——Paul Auster 作品における「ホテル」表象

追手門学院大学講師 植 村 真 未

Paul Auster は、ひとり自室に籠るキャラクターを頻繁に描く。一方で、作家自身は自室ではないスタジオの一室、「非日常」の空間で執筆を行っている。こういった観点から、本発表では Auster 作品における、非日常の部屋として、ホテルの客室、あるいはホテルという空間が作家の想像力といかにか絡み合っているかを探る。まず、Auster 作品におけるホテルの表象を概観し、それらが持っている二つの役割を検討する。つまり、匿名的で、危険な場所である一方、人々を無条件に受け入れる場としての機能である。その上で *Travels in the Scriptorium* の、病院でも、監獄でも、ホテルの一室でもないが、同時にそれらのどの特徴をも併せ持つこの部屋をホテルの客室として読むことを試みる。部屋に対する強い拘りを見せるこの作家の想像力が、非日常の部屋であるホテルの客室という空間とどのように結びついているのかを探っていきたい。

## 第 4 室 (K 棟 4 階 K402 講義室)

---

第 1 発表 (11:10 より)

司会 関西大学教授 板倉 厳一郎

## オーストラリア日系強制収容文学の考察

——Cory Taylor の *My Beautiful Enemy* における人種・セクシュアリティ表象を手がかりに

大谷大学助教 古川 拓磨

オーストラリアでの第二次世界大戦中の日系強制収容を扱う文学作品は、あまり周知されていない。本発表では、まずこのようなテーマの文学作品が生み出されてこなかった経緯を辿る。オーストラリアの場合、様々な人種的・地理的背景を有する人々が十把一絡げに「日系人」として収容された事実があり、その複雑性と小規模のゆえに文学的土壌が発達し難かったことを検証する。続けて、Cory Taylor の *My Beautiful Enemy* (2013) から、作中で語られる収容所内の日系人と看守である兵士たち、またその周辺に位置する女性たちとの交流を分析する。主人公 Arthur を含めた看守たちに見られる、ホモフォビアやゼノフォビアの感情、そして Sedgwick のいう「ホモソーシャル」な様態に関して検討してみたい。戦争中の収容所という閉鎖的な空間の物語は heroic で manly となることが想像し易いが、作者がいかにかそれを回避し描こうとしているかを明らかにする。以上より日系強制収容文学が、従来を中心であった北米を超えて展開する可能性を、オーストラリアの場合から提示したい。

第2発表 (11:55 より)

アリ・スミス四季四部作における〈共〉の可能性

大阪大学准教授 霜鳥 慶邦

イギリスの EU 離脱 (ブレグジット) の是非を問う国民投票から新型コロナウイルスのパンデミックの時代までを、ほぼリアルタイムで大胆なコラージュの技法を用いて描くアリ・スミスの四季四部作 (『秋』(2016年)、『冬』(2017年)、『春』(2019年)、『夏』(2020年)) は、すべてが「ばらばら」になる時代状況において「つながり」を再構築することを主要テーマのひとつとする。本発表は、四季四部作における「つながり」のテーマに、アントニオ・ネグリとマイケル・ハートが〈帝国〉三部作で提唱する〈共〉の可能性を探究することを目的とする。主に四季四部作における言語、(デジタル) コミュニケーション、移民、家族、変身、コラージュといったトピックについて、〈帝国〉三部作の政治哲学と比較しながら分析することで、四季四部作の文学的想像力が〈共〉を志向する様子を明らかにする。

第3発表 (13:30 より)

司会 関西外国語大学教授 服部 典之

*Never Let Me Go* における恋のさや当て——先導 (者)、人称代名詞、笑い

京都大学大学院生 杉野 久和

『わたしを離さないで』(*Never Let Me Go*, 2005) の恋愛成就と連動しているのは、空間・社会的な〈位置〉関係である。例えば、トミーと結びつくパートナーは、必ず、〈前〉で先導する「リーダー」(leader) なのだ。そして、トミーを奪いあう三角関係—異性愛の〈三角形〉—は、〈境界線〉が戦略的に引かれることで度々二分される。ここで注目すべきは、したたかに恋愛バトルを展開する女性たちの言葉遣いである。すなわち、彼女たちは「人称代名詞」を巧妙に使用し、自身とトミーの結びつきを示したり、恋敵を排除したりしようと試みる。とりわけ、一人称の代名詞「わたし/たち」に「笑い」が加わるとき、幸福感、不快感、暴力性へと繋がり、最後まで三角関係に変動をもたらすのだ。本発表は、変容する三角関係の形態に焦点を当てることで、作品の構図を解き明かす試みである。

第4発表 (14:15 より)

*The Remains of the Day* における疑似家族への思慕

関西学院大学大学院生 平野 牧子

カズオ・イシグロの長編第三作 *The Remains of the Day* (1989)におけるステイブンスとミス・ケントンの関係性は、「恋愛」という文脈で論じられることが多く、ステイブンスはその恋愛感情をひたすら抑制しているとされてきた。しかし、ミス・ケントンを描写する彼の性的感情が欠落した語りには、異なる解釈も可能ではないか。つまりステイブンスが彼女に求めたのは恋愛ではなく、「偉大な執事」を目指す自分を支えてくれる母的な存在だったのではないか。そしてステイブンスの父親を含めた3人の関係からは、肉親との縁が薄い彼らが、ダーリントン・ホールの一つ屋根の下で、「疑似家族」として暮らす姿が浮かび上がる。本発表では、共に「家族」を求めつつも、ステイブンスが母的な存在を求める一方、ミス・ケントンは本当の家族を得るために「疑似家族」を手放したことを提示し、イシグロが描く家族関係の複雑さを考察したい。

第5室 (K棟4階 K403 講義室)

---

第1発表 (11:10 より)

司会 関西学院大学教授 松宮 園子

ポストヒューマン文学における「尊厳」

——*Never Let Me Go* と *Machines Like Me* との比較を通して

京都大学大学院生 肖 軼 群

本発表は、Ian McEwan の *Machines Like Me* (2019) と Kazuo Ishiguro の *Never Let Me Go* (2005) との比較を通して、二人の作家が提唱するポストヒューマン文学における「尊厳」の定義について検討する。創作年代もやや離れていて、語り手における相違点も大きい両作品は、現時点では比較研究されていない。それぞれの作品に登場する AI ロボット Adam とクローン人間 Kathy は、共に人間によって自由が奪われ、人格が認められないまま死を迎える運命を与えられている。しかし、彼らがこのような無意味に見える人生を生きることへの執着を示す点は着目すべきである。本発表では、二人の「非人間」の芸術創作や記憶への向き合い方、さらに死生観などの側面における共通点を論証する。これらの共通点から「尊厳」というキーワードを提起した上で、インタビューや映画脚本などの資料に含まれる Ishiguro と McEwan の言説と結び付けることによって、両作家がいかに関「非人間」と「尊厳」の逆説的な組み合わせを用いることによって、人間性の本質を表出しているかを解明したい。

第2発表 (11:55 より)

人工知能は人間の「継続」になれるか——*Klara and the Sun* に見る AF 像と人間像——

近畿大学非常勤講師 陳 憚 懿

Kazuo Ishiguro の *Klara and the Sun* において、AF である Klara は Josie の行動を再現したりその特徴を学習したりすることはできるが、Josie として他の人間との関係を継続することはできないと考える。人間達も Klara が Josie の「継続」となることを強く願いながらも、Klara を Josie として受け入れることはできないだ

ろう。Klara は人間の持つ自己犠牲や利他主義などの美德を有するが、人間ならではの利己主義や自己欺瞞、及び複雑な心を持たない。本発表では、人工知能が普及する未来社会と人間の知能を高めることができる時代を舞台としている本作品を、AF の Klara や主人公 Josie などの人間達に着目することで、AF 像と人間像を比較し、Ishiguro の作品世界では、人工知能は人間の「継続」になれないことを論証する。

第3発表 (13:30 より)

司会 ノートルダム清心女子大学教授 新野 緑

ジョージ・エリオットのリアリズムの進展における  
『急進主義者フィークス・ホルト』の位置づけ

同志社大学嘱託講師 石井 昌子

発表者はこれまでに *Adam Bede* (1859)、*The Mill on the Floss* (1860)、*Middlemarch* (1871-72)におけるシンパシーの乏しい登場人物に注目することにより、George Eliot (1819-80)の長編小説のリアリズムがこの順序で進展していることを示した。本発表では中期作品 *Felix Holt: The Radical* (1866)を取り上げ、シンパシーに乏しい人物の一人 Mrs Transome に注目する。

この小説のリアリズムについては、プロットに含まれる法律関係が煩雑、主人公の人物造形が断片的、もしくは矛盾している、もしくは大理石に彫ったように明快過ぎる、貧乏な牧師の養女で裕福な暮らしに憧れる Esther が荘園領主の権利を放棄する経緯に説得力がないなど、様々な疑問が呈されている。本発表は、トランサム夫人の心理描写を読み解き、『アダム・ビード』の Hetty のように作者の道徳観に囚われた一面的描写になっているのか、それとも『フロス河畔の水車場』の Tom や『ミドルマーチ』の Rosamond のようにその性格が多面的に描かれているのかを吟味し、リアリズムの進展の度合いを検証したい。

第6室 (K棟6階 K601 講義室)

---

第1発表 (11:10 より)

司会 神戸常盤大学教授 山崎 麻由美

フロレンス・ナイチンゲールの著述をマーガレット・フラーとの比較から読み解く

岐阜県立看護大学准教授 木村 正子

フロレンス・ナイチンゲールとマーガレット・フラーは同時代人であるが、公的に活動した時期、場所、分野などが異なることもあって、これまで比較研究の対象となることが稀であった。しかし両者の著述を精査すると、そこには合わせ鏡のような類似点が見られ、フラーはナイチンゲールの先駆者的存在であったことが導き出せる。そこで本発表では両者の共通点として、女性作家のロールモデルとしてのジョルジュ・サンドからの影響と、男女関係の理想モデルを追究する典拠としての古代の著作への傾倒という二点に焦点をあてて、フェミニズム的な主張を繰り返しつつも、後の女権運動とは一線を画した両者の著述について論じる。早世したフラーと交代する形で公的な場に登場したナイチンゲールであるが、実は看護活動においてもフラーが先駆的立場にいた点にも言及したい。

第2発表 (11:55 より)

司会 阪南大学教授 杉村 醇子

## 『キャストブリッジの町長』と冗談の倫理

広島市立大学講師 原 雅 樹

マルクス主義批評によれば、ハーディの『キャストブリッジの町長』は、近代資本主義社会に適応できずに没落した労働者階級出身の男ヘンチャードを弁護的に描いた作品として読むことができる。本発表の目的は、こうした読解を踏まえたうえで、ヘンチャードの没落を決定づける彼のある「欠点」、冗談や悪ふざけを好む性格に着目し、その意味するところを探ることによって、ハーディによる近代資本主義社会批判の射程をより明確化することである。そのさい手がかりになるのは、ヘンチャードの冗談が、言葉の意味の揺らぎや遊び、曖昧性といった文学作品の特性と関連付けられているということであるということである。とすればハーディは、冗談好きのヘンチャードを弁護的に描くことで、資本主義社会における文学作品の倫理的価値を擁護しようとしているのではないか。本発表ではこの仮説を検証したい。

### 第3発表 (13:30 より)

司会 同志社大学教授 桐 山 恵 子

#### ウォルター・ペイターと透明な自己 ～〈想像の肖像〉における理想的人格～

京都大学大学院生 虹 林 桜

本発表は、ウォルター・ペイターのエッセイ「透明的性格」(“Diaphaneité”)における自己認識の基本的概念の美学的考察が、ペイターのフィクションにおけるキャラクター像にどのように反映されているかを論じるものである。

まず、「透明的性格」について、発表者のこれまでの分析、考察結果を紹介する。そして、「透明的性格」はペイター独自の自伝的ジャンル〈想像の肖像〉(imaginary portrait)の原型といわれる作品であり、ペイターが複数の異なる時間に存在する自己を統一する性格に言及していることを、本発表の土台として提示する。

次に、上述の性格に代表されるペイターの理想的自己はどのように自身のフィクションにおいて展開されているかを、〈想像の肖像〉ジャンルの作品群から複数のキャラクターを抽出し、検証する。

最後に、ペイターは、芸術によって育まれる理想的自己が現実自己に自己修練によって可能となることを示すために、キャラクター造形を行った可能性を提示する。そして、理想的自己の育成という観点で、ペイターの提唱する、芸術によって育まれる理想の人物像について考える。

### 第4発表 (14:15 より)

#### 「王女の誕生日」における外面と内面の美醜の相克とそのアイロニー

武庫川女子大学大学院生 森 元 奈 菜

オスカー・ワイルド(Oscar Wilde, 1854-1900)は、1888年に『幸福な王子、その他の物語』(*The Happy Prince and Other Tales*)、1891年に『ざくろの家』(*A House of Pomegranates*)の2冊の童話集を出版している。2冊目の『ざくろの家』に関しては、装飾的な描写が多く盛り込まれ、物語を理解することがより難解になっている。また、先行研究では、童話としての慣習的形式から大きく逸脱しているとの指摘もある。W・B・イェイツは、『幸福な王子、その他の物語』を高く評価する一方で、『ざくろの家』は不必要な描写や過剰な装飾によって台無しになっていると述べている。本発表では、『ざくろの家』の中でも、装飾的な描写が多い「王女の誕生日」(“The Birthday of the Infanta”)を取りあげ、外面の美醜と内面の美醜との関係をめぐり、童話における一見慣習的とおもわれるモチーフが共通して見られ、その相克とアイロニーが確認できる点を検証し、その意味を、ワイルドの芸術論とも絡み合わせて考察してみたい。

第1発表 (11:10 より)

司会 神戸大学准教授 南 佑 亮

### 「Vi up to 人」構文と社会的接触

立命館大学嘱託講師 濱 上 桂 菜

本発表では、**up** を用いた水平移動を表す文 (例: *I walked up to him.*) を取り扱う。これまでの記述/認知言語学では、このような **up** は「接近」を表すとしてきた。その一方で、次の2点を説明できずにいた。つまり、「接近」にはそぐわない動詞 **go** が使用される点 (例: *I went up to him.*)、反対語 **down** が遠ざかることを表さない点である。そこで本発表では、構文文法の視点から、このタイプの文を構文レベルで捉えて問題を解決する。まず、**walk/run up** では、人への移動を表す割合が高いため、「移動様態動詞 **up to** 人」構文が定着している。それは「ある移動様態で動作主が人のところに移動する」ことを表す。さらに、移動様態動詞ではない **come** の場合も人への移動を表す割合が高いため、さらに抽象化された「Vi up to 人」構文 (意味: 動作主が人のところに移動する) が定着していると考えられる。興味深いのは、このタイプの文の直後に社会的接触が記述される割合が高いことである (例: *I walked/ran/came up to him and said, ...*)。「Vi up to 人」は、このような人間の基本的な社会行動に深く関わるため、構文として定着したと考えられる。

第2発表 (11:55 より)

司会 関西外国語大学准教授 大 宗 純

### Dialectal variations and agent phrase in *get*-passive: a case of New Zealand English

大阪公立大学教授 豊 田 純 一

This paper examines the use of *by*-agent phrase in the *get*-passive, particularly focusing on New Zealand (NZ) English. The corpus analysis (Wellington Corpus) yields an interesting result, and it should be noted that the use of agent phrase in the *get*-passive in NZ English is extremely frequent. Once it is compared with the British English counterpart, it is ca. 10 times more frequent. On the other hand, the *get*-passive in NZ English normally still retains earlier grammatical characteristics which were prominent at the emergence of the construction, such as the facilitative reading. The presence of agent phrase may appear to emphasise transitivity, but overtly expressed agents are often generic or a group of unspecified people, and thus, transitivity can be in fact lowered. Generic nature of agent along with facilitative reading of the grammatical subject indicates that the construction is functionally similar to the middle voice. Judging from these, it is fair to claim that the *get*-passive in NZ English does indeed retain older grammatical characteristics, strongly suggesting that the causative-reflexive construction is a strong candidate for the origin of the *get*-passive.

第3発表 (13:30 より)

司会 神戸大学准教授 南 佑 亮

### 【招待発表】形容詞的受身と状態性

龍谷大学教授 前 川 貴 史

英語の過去分詞の用法のうち、*the stolen money* の *stolen* のような「形容詞的受身」は、「～された」・「～さ



# シンポジウム要旨

英米文学部門 (K棟2階 K202 講義室)

---

幽霊を見る、死者の声を聞く——英米文学における生と死のあわい

司会・講師	同志社大学教授	下 楠 昌 哉
講師	龍谷大学准教授	池 末 陽 子
講師	関西外国語大学講師	友 田 奈 津 子
コメンテーター	アンソロジスト・文芸評論家	東 雅 夫

## シンポジウムのねらい

AIをはじめとする科学技術の急速な進展を背景に、我々を取り巻く状況は目覚ましい変化を遂げています。しかしながら、死という運命は相変わらず我々を待ち受けています。古今東西、人は死と死者について様々に思考を凝らし、それらに何らかの表現を与えようとしてきました。今回は17世紀英国、19世紀アメリカ、20世紀アイルランドで文学的に描かれた死者の姿と声を、司会を含めた三人の講師で検証してみたいと思います。今回のシンポジウムには、東雅夫氏にコメンテーターとして加わっていただけることとなりました。死と死者に関わる真摯な表現の試みは、時代と地域を越えた結果、幻想的、あるいは怪奇なテキストとしてその姿を現すことがあります。長らく日本の読者を怪奇と幻想の園へと導いてきてくださった東氏に、講師が扱うテキストにまつわる思い出やエピソードを編集者あるいはアンソロジストの視点から語っていただき、それぞれのテキストが持つ幻想性、怪奇性についてもフロアの皆さんと考え、味わう機会を持ちたいと思います。

## 死の床に横たわりて——《物》としての John Donne の生と死の身体

関西外国語大学講師 友田奈津子

死体が「完全な《物》の緊密さ」を持つことを描いた大江健三郎の文壇上の処女作『死者の驕り』(1957)にインスピレーションを与えたのは、生の只中にも常にも死を見つめ続け作品を生み出した John Donne の“Death be not proud”(「死よ驕ることなかれ」)で始まる“Holy Sonnet X”である。時代と空間を隔ててもなお「死」を語るのに、この17世紀の詩人は最も相応しい。

挽歌や葬送歌といった直接死を詠う作品のみならず、恋愛詩、宗教詩においても Donne の眼差しの先には死すべき運命にある人間の肉体がある。聖なる「魂」は、塵を固めた「土くれ」である肉体に囚われているとするキリスト教的肉体観の中で、Donne は生きた身体を「生ける墓」、「2 ヤードの皮膚」で覆われた魂の牢獄と描く。さらに「死体」は墓の中で蛆虫に食われ、溶解されるというグロテスクな描写へと導かれる。冷徹なまでに《物》として描かれる身体への眼差しはしかし「死」という存在を「魂」と「肉体」との間に内在するものとして提示することで、伝統的な神学的身体論を超えていく。本発表では死を抽象的に描くことなく、リアルに人間存在の傍らに存在するものとしてみる Donne の身体描写を追う。

## 女が語り始めるとき——Edgar Allan Poe の 作品における霊との交信

龍谷大学准教授 池末陽子

19世紀中葉のアメリカはまさにスピリチュアリズム流行前夜といえる状況にあった。Edgar Allan Poe の作品にも、転生、交感、メスマリズムなど、そこかしこにその影響を見て取れる。“Thou Art the Man”(1844)では被害者の死体に犯人を暴露させ、“The Tell-Tale Heart”(1843)では死者の心臓音が犯人の自白を促している。奇しくもこの二編には、近年の邦訳により、新たな解釈が付け加えられることとなった。いずれも既訳では

犯人は「男」だったが、桜庭一樹氏は前者を「お前が犯人だ」として翻案し（集英社文庫ヘリテージシリーズ、2016）、河合祥一郎氏は同様に犯人を女性と見立てて後者の新訳に挑んだ（角川文庫、2021）。だが、Poe の作品では女性が自主的に語ることは滅多にない。本発表では、これらの翻案および翻訳が既訳作品からどのように変化したのかを糸口に、ポー文学における死者と女性の語りを繋ぐものについて考察してみたいと思う。

## Clay とは何か——James Joyce の *Dubliners* における霊的側面の一例

同志社大学教授 下 楠 昌 哉

James Joyce の *Dubliners* (1914) は、著者の最初の短編集である。作者本人の出版の意図に関する有名な文言はあるものの、それ以外にも出版社に対して出版をアピールし、出版後は多くの同時代の読者の興味を引くような工夫がなされていたと考えるのは不自然ではなからう。Joyce はこの短編集において複数の作品で「死」をモチーフとして扱っているが、そうした作品では当時巷で人気の幽霊譚や降霊会を意識したように思われる場面やイメージを散りばめている。そのように短編集全体をとらえてみると、収録作の一つ“Clay”において、洗濯屋の下働きであり、老い先が見えつつある Maria がホームパーティーで目隠しをされ、意図せず触れさせられてしまう湿った怪しげな物質（substance）には、降霊会の暗闇で生じることが当時報告されていた霊界からのエクトプラズミックな物質のイメージが与えられていることが感得される。「土くれ」「土」などとこれまで訳されてきたこの短篇のタイトルを、講師が「粘土」と訳して出版するに至った経緯も含めて、この怪しげな物質について考察してみたい。

### 英語学部門 (K棟3階 K302 講義室)

---

#### 焦点化・主述関係の諸構文をめぐる統語と意味

司会・講師

講師

講師

関西外国語大学准教授

大阪大学大学院生

関西学院大学助教

山口 真 史

中 野 晃 希

小 林 亮 哉

#### シンポジウムのねらい

本シンポジウムの目的は、英語と日本語における移動や繫辞を含む焦点化文と主語述語関係を含む文を分析対象とし、それぞれの文がもつ統語的特徴と意味的特徴について理論的説明を行うことである。特に、次の3つのテーマについて議論を展開し、理論的・経験的に貢献しうる提案を示す。1) 日本語の繫辞付き焦点構造に対して新たな焦点構造を提示することを目的とし、繫辞残留現象を観察することにより、ノダ文から分裂文とスルーシングがそれぞれ派生されていることを提示する。2) 主語が規範的な主語位置である TP 指定部ではなく基底生成位置(vP 内)に残留するために従来の TP に相当する統語対象のラベルが  $\phi$  素性の共有によって決定できない例として、場所句倒置と主語・補語倒置を取り上げ、これらの現象を Chomsky (2013, 2015) によって提唱されたラベル付けアルゴリズムを用いて理論的に説明することを試みる。3) 英語の二次述語構文の統語構造に焦点を当て、Zeijlstra (2012) 等で提案されている上方一致による一致操作が必要であると主張する。

## 繫辞付き焦点構造における派生と関連性

大阪大学大学院生 中野 晃 希

本発表では、これまで単一の構造から派生されると考えられてきた繫辞付き焦点構造に関して、新たな焦点構造の指摘をするとともに、それら派生の再考を行う。Hiraiwa and Ishihara (2012) において、(1) のノダ文から (2) の分裂文が、さらにそこから (3) のスルーシングを含む文が派生されると提案されているが、その中心となる繫辞の扱いに関してはあまり議論が多くなされておらず、また、(3) とその派生過程である (2) との容認性が一致しない例も報告されている。

- (1) 太郎が弟のお菓子を食べたのだ
- (2) 太郎が食べたのは弟のお菓子をだ
- (3) 太郎が何かを食べたらしいが、僕は弟のお菓子をだと思う。(僕は何をだかわからない)

この派生について、繫辞を中心とした新たな焦点構造である (4) の繫辞残留現象を提示することで、本発表では、(1) のノダ文から (2) と (3) がそれぞれ派生されていると提案する。

- (4) A: 太郎がまた弟のお菓子を食べたんだって  
B: だと思ったよ

また、通常の繫辞文と焦点構造それぞれに生起する繫辞の詳細な比較分析の必要性を議論する。

## 主語残留現象とラベル付けアルゴリズム

関西学院大学助教 小林 亮 哉

本研究は、場所句倒置 (LI) と主語・補語倒置 (PAB) の派生を Chomsky (2013, 2015) によって提唱されたラベル付けアルゴリズム (LA) の枠組みを用いて理論的に説明することを試みる。LA の下で、従来の TP に相当する統語対象のラベルは、T 主要部と TP 指定部に位置する主語名詞句が  $\phi$  素性を共有することで決定される。しかし、LI や PAB では、主語名詞句は基底生成位置 (vP 内) に残留し、焦点としての解釈を付与されると考えられる (cf, Collins (1997), Kitada (2011), Koike (2013)) ため、従来の TP に相当する統語対象のラベルを  $\phi$  素性の共有によって決定することはできない。本研究では、TP 指定部を占めるのは前置詞句や分詞句などの前置された要素であり、これらの  $\phi$  素性を持たない要素は、代わりに C 主要部から継承される話題素性との共有によって当該の統語対象のラベル決定に貢献すると提案する。また、本研究は、LI や PAB におけるいくつかの経験的事実に対しても説明を試みる。

## 二次述語構文から見る上方一致操作の必要性

関西外国語大学准教授 山口 真 史

本研究では、Chomsky (2000) によって提案される一致操作とは逆の関係を要求する一致操作である上方一致の必要性について議論する。Chomsky (2000) では、統語構造上高い位置ある解釈不可能素性を持つ要素に C 統御位置される位置に対応する解釈可能素性がある場合に一致が行われるという「一致操作 (Agree)」が提案されている。一方、Zeijlstra (2012) や Bjorkman and Zeijlstra (2019) によって提案された上方一致 (Upward Agree) では、Chomsky (2000) が提案した操作とは逆の関係となった場合に一致操作が行われる。

- (1) a. [ XP<uF> ... [... YP<F> ... ] ]  
b. [ XP<F> ... [... YP<uF> ... ] ]

本研究では(2)で提示する英語における二次述語構文を観察し、二次述語が意味上の主語に C 統御されるという事実を提示する。

- (2) a. John hammered the metal flat.  
b. Mary left the room angry.

そして、それらの事実を理論的に説明する構造を提案し、二次述語構文が持つ一致現象は Chomsky の提案する一致操作では説明ができないが、Zeijlstra 等によって提案されている上方一致によって説明可能であることを示す。

## 大会準備委員

委員長： 莊中 孝之（京都女子大学）

副委員長： 田中 ちはる（近畿大学）

英文学部門委員：

三浦 誉史加（大谷大学） 吉田 朱美（京都府立大学）

米文学部門委員：

内田 有紀（龍谷大学） 齋藤 彩世（同志社大学）

英語学部門委員：

大宗 純（関西外国語大学） 南 佑亮（神戸大学）

開催校委員：

西谷 拓哉（神戸大学）

（五十音順、敬称略）